

伝統芸能継承団体の再生過程に関する実践報告
—伊勢神楽十二神祇の場合—

迫俊道（広島市立大学）

広島における神楽と本研究の目的

神楽と呼ばれるものの起源は古く、これまでに全国の様々な地域の神社において秋の祭礼に神楽は奉納されてきた。神楽は日本の各地で民衆的な楽しみという文化的な要素から切り離されることなく、伝統的なレクリエーション活動として、今日まで継承されてきた。広島県は全国の中でも最も神楽が盛んな地域と言われており、神楽どころとして有名である。広島県の神楽は、「芸北神楽」「安芸十二神祇」「芸予諸島の神楽」「比婆荒神神楽」「備後神楽」に分類される（三村, 2004）。その中でも、もともと広島県の芸北地域で行われ、今日では芸北地域以外にも広がってきた芸北神楽は戦後に神楽の競演（共演）大会が開かれるようになった。現在、芸北神楽は人気を集め、神楽ブームを巻き起こしている。神楽の大会は様々なところで開催されており、大変な盛り上がりが新聞紙上等で報告されている。芸北神楽に魅力を感じ、新たに神楽団（神楽を継承している団体）を結成・再結成する、また芸北神楽を神楽団の保持演目として新たに加えるという動きも見られる。

芸北神楽に魅了された人々が神楽団を立ち上げる、また存続の危機にある神楽団が芸北神楽を取り入れることによって団を活性化していくという現象は一部に見られる。だが、一方で少子高齢化の影響を受け、後継者不足の問題から神楽団の存続が厳しくなっている神楽団があることも事実である。それは芸北神楽を担ってきた神楽団にもいえることである。特に深刻なのは広島県内の西部方面に分布している安芸十二神祇、この神楽を継承している神楽団である。本研究において対象とするのは広島県において伊勢神楽十二神祇（「安芸十二神祇」の中に位置づけられる神楽）を継承してきたI神楽団である。I神楽団は2001年から2003年までの3年間、活動を休止し、神社で神楽を奉納していない。

日本の伝統芸能の伝承過程の特徴は、指導法、稽古方法について書かれたものが殆どないことである。指導者が弟子に身体技法を直接指導する「口伝」と呼ばれる方法がとられてきたため、「身体表現である芸能の技能は、一世代欠けると完全な伝承の継続は不可能」（樹下, 2001）であるとも指摘されている。本研究の目的は、I神楽団への参与観察を行うことにより、I神楽団が活動休止に至った背景、そして、活動休止状態から実際にI神楽団が再生するまでの過程、そのエスノグラフィーを報告することにある。

本研究の対象と方法

今回対象とするI神楽団は、伊勢神楽十二神祇と言われる神楽を約170年近く承継してきた。この神楽の特徴は、神事的要素が強く、簡素であることだ。『広島県の神楽』（1981年）を上梓した民俗学者の真下三郎によれば、広島県内においてI神楽団が伊勢神楽十二神祇の基本形を崩さずに最も忠実に保存してきているという。その他の文献、論文、雑誌の中でI神楽団は取り上げられ、民俗学的に注目されているが、近年、神楽団を構成するメンバーが減少し続け、2000年の地元神社での奉納を最後に、活動を休止している。

本研究の方法は、I 神楽団に対する参与観察である。参与観察については、社会学者の佐藤郁哉によって、「当事者と局外者という二つの視点をあわせもつ第三の視点」（佐藤，1992, p. 149）が意味を持つこと、また「一步距離をおいた関与」という参与と観察のバランスが指摘されている。ここで、本報告者と I 神楽団とのこれまで及び参与観察中の関係を説明しておくことにする。本報告者は過去に I 神楽団に所属してきた経歴がある。また、活動休止状態にあった神楽団が再生するまでの活動にも参加し、報告者自身が神楽団員として、I 神楽団へ復帰している。これらが I 神楽団にもたらした影響はかなりあると考えられる。これまで全く神楽団と関係を持っていなかった者が対象地域と関わり参与観察することは不可能ではないが、I 神楽団の構成メンバーは広島県の I 地域にほぼ限定されており、神楽団の再生に関する社会的過程を探るにはかなりの困難が伴うであろう。

神楽団再生の過程（一部）

I 神楽団が活動休止したのは、団員不足が主な原因であった。また、神楽の指導者及び世話をする者は、20 年以上もの間、同じままであった。神楽団に小学生の頃に入団する者がいたとしても、高校入学などを機に部活動や大学受験の塾通いのためにやめていく者が多く、そのため神楽団の特定のメンバーに過重な負担がかかる時期が続いた。神楽団の維持が難しくなった時、関係者による会合がもたれ、活動を休止にすることになった。

そのような中で再生に向けた動きが見え始めたのは、活動休止後 1 年半が経過したころ、I 地区の小学校校長が子どもたちに地域の文化を教えたいと考えたころであった。小学校において神楽を披露する機会が設けられたのを契機に、I 地区のまちづくり協議会の会長を含め、神楽団再生のための会合が開催されていった。そして、約 30 年前に I 神楽団についてまとめられた冊子をもとに、神楽経験者に団員募集ならびに神楽団再生の協力が募られた。会合の中で議論されていったのは、次のようなことであった。I 神楽団が活動を停止した当時は、I 地区の中でも神楽団員となるのは、I 地区の N 地域に限定されていたが、それを I 地区全体に広げた。また、指導、神楽団の世話などの負担を分担するために、神楽団の組織を再編成した。学会発表当日に、詳細な I 神楽団の再生過程を報告する。

引用・参考文献

- ふるさと運動促進委員会編.(1977). 郷土芸能神楽編, 石内公民館.
- 真下三郎.(1981). 広島県の神楽, 第一法規出版.
- 三村泰臣.(1995). 広島市の石内神楽. まつり同好会. まつり通信, 408: 5-6.
- 三村泰臣.(2004). 広島神楽探訪, 南々社.
- 佐藤郁哉.(1992). フィールドワーク 書を持って街へ出よう, 新曜社.
- 樹下文隆.(2001). 神楽普及のための詞章読解の試みと原態の比定および詞章の文学的意義の解明を目指して. 米田雄介ら. 神楽の変容とその社会的基盤に関する研究, 平成十二年度県立大学重点研究事業研究成果報告書.
- 民俗芸能学会.(1993). 特集 継承・断絶・再生, 民俗芸能学会. 民俗芸能研究, 18.